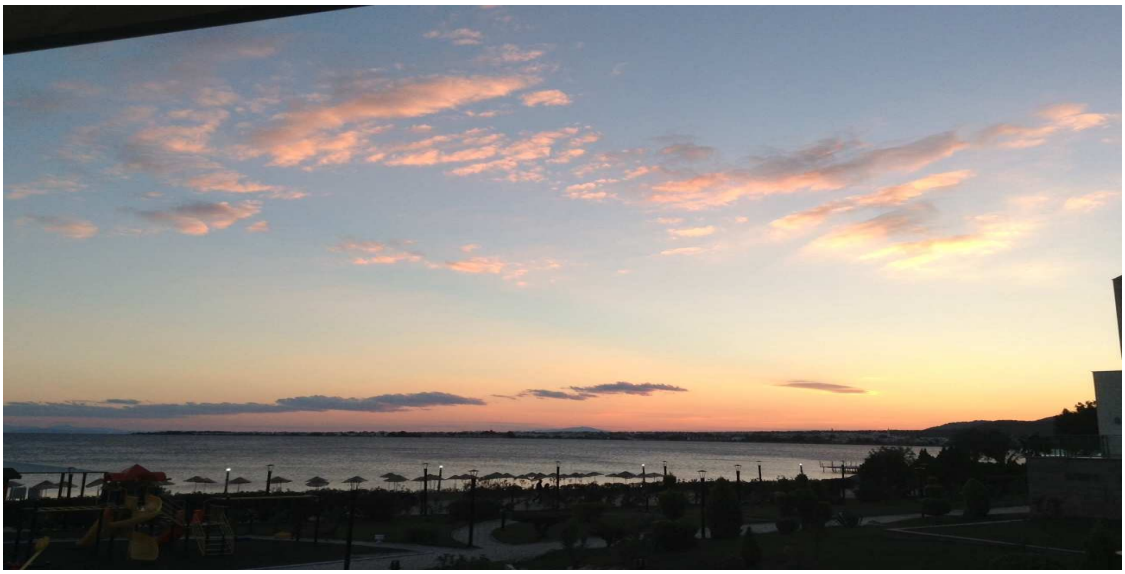
特定非営利活動法人

ロングステイクラブ®

２０１３年　秋季号　ＶＯＬ.８６



トルコ・エーゲ海の夕焼け

～第二の人生を豊かに～
Long Stay Club

２０１３年　秋季号　ＶＯＬ．８６　　目次

【海外旅行滞在記】

仏、ポルトガル、スペイン・スピリチュアル紀行　　会員　森川浩司　・・・・　１～１０

【クルージング】

豪華客船サンプリンセス号でのクルーズ（その２）　会員　中井川久男・・・・１～１４

南極探検ツアー（その２）　会員　馬越　治・・・・・１５～１８

【旅行博探訪記】

ＪＡＴＡ旅博２０１３　会員　秋本佳之・・・・・１９～２１

【東京散歩】

迎賓館　赤坂離宮見学　会員　大野康昭・・・・・２２～２３

【ＬＳＣイベント】
酷暑はウナギで暑気払い　２４～２５

９月座談会、情報交換会、１０月特別座談会、ＬＳＣスクール、料理教室　２６～２７

【編集後記】　・・・　２８

表紙写真　　トルコ･エーゲ海の夕焼け　秋本佳之氏　提供

仏、ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ、ｽﾍﾟｲﾝ・スピリチュアル紀行

2013 年 8 月 27 日　森川浩司

始めに

昨年は２ヶ月をかけてスペイン・サンチャゴへの巡礼を行い、多くの素晴らしい出会いとスピリチュアルな奇跡体験をした。今年はフランス・ノルマンディーの町ルーアンを訪れ、１４３１年に異端者として火刑死した Jeanne d'Arc（ジャンヌ・ダルク）の足跡に触れること、そしてポルトガルの巡礼地として最も有名な Fatima の町に行き１９１７年聖母マリアが出現した奇跡の追体験をすることだ。また、昨年やり残した２点、サンチャゴ大聖堂での大香炉回しを見ることと、スペイン最西端 Fisterra への巡礼旅も体験するつもりだ。例によって約１０kg のリックと寝袋を持っての３０日間の行程だ。さて、どんな旅になるのだろう。

ルート

ルートは：　東京～パリ～ルーアン～パリ～ポルト～ナザレ～ファティマ～サンチャゴ～フィステラ～サンチャゴ～ポルト～パリ～東京　である。 飛行機は東京～パリ間とパリ～ポルト間。後は汽車やバスや徒歩。巡礼宿は行き当たりばったり、安宿は Booking.com で予約し、切符は当日窓口で手に入れる。さー、出発しよう。

ジャンヌ・ダルク

ミラ・ジョボビッチのジャンヌは格好よくって彼女のイメージが抜けないけれど、ジョボビッチを知らない人でもジャンヌの名前は知っている。それほど有名なのだが、その実、彼女の生涯も時代も余り知られていない。１３歳で神の声を聞いてからフランス統一を助けるという、驚く

べき働きをして１９歳で敵国イギリス軍に火刑死させられた実在の人物。そんな彼女の一端にふれるべく、生前最後の６ヶ月間幽閉され異端裁判を受け刑死し、その 25 年後に復権宣言された場所、フランス北部ルーアンの街を訪問することにした。

(写真：ジャンヌの騎馬姿、オルレアン市解放凱旋：　ルーアンの旧市街)

約６００年前に起きたこの農家の一少女が起こした奇跡の詳細は、１４３１年に行われた「異端裁判」と１４５５年に開始され７ヶ月で結審した「復権裁判」の両議事録が幸運にも現存しており（日本語訳本も出ている）、実際に何が起きていたのかを多くの証言から知ることができる。

その概要を抑えておくと、当時のフランス内部の勢力図はばらばらで、北西部はノルマンディ公のイギリス領であり、彼とイギリスはさらに勢力を南へと伸ばすべくシャルル王(7 世）率いるフランスと 100 年戦争(1337-1453)中であった。1429 年ジャンヌ 17 歳は、神の声に従い”オルレアン市の包囲解放”と”シャルル王の聖別と戴冠”を行うべく意を決し立ち上がり、シャルル王太子に謁見、3 週間に渡る査問を経て、甲冑と白い騎馬を与えられ自ら考案した天使を描いた旗印を掲げて凛々しい姿で軍に迎え入れられた。

早速、イギリス軍に半年に渡って包囲されていたオルレアン市解放戦線に参戦、わずか数日でこの街を解放してしまう。さらにそれから僅か 2 ヵ月後にはシャルル王太子をフランス王位継承宣言の儀式（聖別と戴冠式）に導き、100 年戦争の原因でもあったフランス王位の問題を解決してしまう。神の役割を終え、シャルル王からも褒美として、出身村の課税免除とジャンヌ一家の貴族への列しを得て、ここで身を引けば、めでたしめでたしだったのだが、

(写真、左から：ジャンヌが投獄されていた塔：　火刑場：　異形のジャンヌ教会)

軍は幸運の女神を手放すべくも無く戦いにかりだした。残念ながらその後の彼女はまるで神に見放されたかのように、負傷、敗退の連続で翌年 1430 年 18 歳の時にノルマンディ軍に捕虜になり、さらにイギリス軍に売られ、翌年異端裁判にかけれら、彼女の全ての行動は神から出たものではなく悪魔からでたものだ（だから王位継承儀式も無効）と結審し彼女は火あぶりになる。1431 年享年 19 歳。　しかし、フランス王軍はその後 20 年を経て全てのイギリス軍を駆逐、1453 年に 100 年戦争が終結した。その 2 年後シャルル 7 世はジャンヌの復権裁判を命じ、1456 年 7 月、火刑となった同じルーアンの大司教公邸で前判決破棄宣言がなされ、彼女の復権が確定した。その約 460 年後の 1919 年ジャンヌの列聖がバチカン公国により承認され、ジャンヌは「聖ジャンヌ」となる。シャルル王は恩義を忘れぬ立派な人だったし、ジャンヌによって解放されたオルレアン市民も義理堅く、シャルルのお母さんを名誉市民として迎え入れ、住む場所と年金を生涯与え続け、今でも解放後ジャンヌが入城した 5 月 8 日を記念してオルレアン祭を毎年行っている。ジャンヌの無念はあるだろうけれど、歴史を振り返ってみるとストーリーとしてはハッピーエンドといえるのではないかな。

ルーアンの街

フランス北部一帯は今では何の疑いも無くフランスだが、実は 9 世紀ごろヴァイキング(ノルマン人：北の人）が侵攻して住み着いた地域で、今でもノルマンディーと呼ばれ、フランク人(ゲルマン民族の一部族）が築いたフランスとは人種も歴史も異なっている。

そのノルマンディーの首都であるルーアンは、ジャンヌの時代には、イギリス海峡に面しセーヌ川の河口という地理的条件からイギリス軍の主要拠点として発展していた。今では、「町そのものが美術館」といわれるほど歴史的建造物が多く、また 19 世紀末に生まれた絵画の印象派運動の発祥の地でもあることから「芸術の街」のレッテルも持っている。

(写真、左から：ルーアン駅、ルーアン全貌、印象派絵画のようなセーヌ川舟遊び)

パリ北駅近くの宿からリックを背負い見当をつけた方向にぶらぶら 30 分、サン・ラザール駅に着いたときには汗ばんでいた。ルーアン行きの汽車は 2 時間に 1 本ほど出ている。フランス国鉄にもシニア割引があり 1 時間半の距離で 18 ユーロと、まーまーの運賃だ。スーパーで買ったバケットサンドを食べながら車窓を眺めているうちにルーアン駅に着いた。

小高いルーアン駅からセーヌ川に緩やかに下る２ｋｍほど伸びているメインストリートが「ジャンヌ・ダルク大通り」で、かつての敵地でも今は受け入れられているようだ。宿の場所を探すのに苦労して、あるレストランのお客に案内してもらうことになったが、彼女によると昨日ジャンヌ・ダルク祭が終わったと言われ、がくっときた。どうやら幸先は良くなさそうだ。

次の日からは雨、カッパ姿で精力的にジャンヌに関係する場所を訪問する。　幽閉されていた「ジャンヌの塔」に登り、アジサイが咲いている火刑場で悲劇を偲び、不思議な形のジャンヌ教会で冥福を祈ったが、何も感じないしピンとこない。どうやらその原因は理不尽な死をとげた無念のこの地にあるようだ。ジャンヌを辿るには、やはり生まれ育った、ドイツとの国境に近いドムレミイ村や解放した町オルレアンを歩くべきだったようだ。そこでなら感動も生まれたかもしれない。しかしただの一農民少女を動かした”大いなる力”は、当時の神学最高峰パリ大学の多くの博士らによる分析結果と二つの裁判証言記録からみても、そこには何かあったという事実を否定することはできない。スピリチャル世界の存在を確認できたようにおもう。

翌日からはジャンヌはとばし、「印象派の故郷」としてのルーアンとセーヌ渓谷を楽しむことに方向転換した。その日も雨、でも美術館廻りには格好の天気と自身を励まして、丁度、第 2 回印象派展を開催しているルーアン美術館を堪能する。駐在のころは良くパリ・オルセー美術館でセーヌ河岸の変わり行く光の淡い絵画を見たものだが、ここルーアンがモネ、シルレー、ルノワールなど印象派の本拠地だったとは嬉しい誤算だった。

さらに次の日は、モネがルーアンの全貌を写生したセーヌ渓谷の高台に登ることにした。ルーアン駅近くの宿からジャンヌ大通りを下り、しばらくジグザグの坂を登り 2 時間ほど歩くと、街を一望に見渡すことのできる高台に着いた。パノラマの左端には国鉄の陸橋が、中ほどにはゆったり流れるセーヌ川。そして小高い山々に後ろを守られたルーアンの街が、モネの有名な連作のモデルにもなったノートルダム大聖堂の尖塔(152 ﾒｰﾄﾙ) を中心に広がっている。流れる雲が晴れ、ぱーっと明るく照らされた旧市街は正に絶景だ。”わたしに画才があったら”とないものねだりがつい出てしまうほどだった。

（写真、左から：　ルーアン旧市街、モネの書いた街全貌、ある画家の釣り糸をたれる老人）

ポルトガルのナザレ

キリスト教をかじった人にとってナザレと聞くと“あー、イスラエル・ヨルダン渓谷にある山地でイエスの育った地”だと知っている。それが、何でポルトガルにあるの？　何で海岸なの？という疑問がわいてくる。ポルトからバスで約 4 時間、その疑問を解くためにやってきた、と言うよりは、この地はリゾート地という話なので、雨のルーアンの後、太陽の下、少しのんびりしようとやってきた。宿は海岸から 20 分ほどしんどい丘を登った所にある台所つきのアパート。裏が町一番の大きなスーパーなので自炊が楽しみなロケーション。6 月はシーズンオフ、ここに 3 泊しよう。

町の名前ナザレの由来を抑えておくと、8 世紀にロマノというキリスト教僧が携えていたマリア像がイスラエル・ナザレのもので、彼の死後、聖母マリアの奇跡で当時の城主が命拾いをしたりして、そのマリア像を教会に置き（ノッサ・セニューラ・ダ・ナザレ教会）町の守護聖人として祀り現在に至っている。今でもこの地はポルトガル人の巡礼の対象として有名で、かつてはあのバスコダ・ガマ（1500 年頃喜望峰を回航してポルトガル領インド総督になった）も巡礼したそうだ。　長い弓のように続く海岸に沿っているリプブリカ通りには、多くのレストランやみやげ物屋さん、そしてこじんまりしたホテルがぎっしり並び、ハイシーズンには江ノ島海岸通りのような賑わいを見せるのだろう。今は砂浜に寝そべったり、散歩したりしている家族ずれや恋人らがのんびりと時間を過ごしている。この小さな街は、周りをかなり高い崖と小高い丘に囲まれ、崖上の展望台からみる大西洋の海岸線の美しさ、どこまでも青い空、汗をかいた身体を癒す心地よいブリーズ(風）は忘れがたい。

（写真、左から：ナザレ海岸を望む、ナザレ教会、イスラエル・ナザレからの聖母マリア像）

ナザレでの毎日は、海は冷たく泳げないので周りの丘へのトレッキングや海岸線の散歩、この小さな街には不相応な現代的で立派な図書館通い(PC,Internet が無料)そして毎食事の料理だ。パパイヤ、海老、パスタそして冷えた白のスパークリングワイン、サラダにバケット、至福の時でした。

ポルトガルの巡礼地ファティマ

ポルトガル人で「ファティマの奇跡」を知らない人はいない。またクリスチャン世界から多くの巡礼者がやってくるこの地は、第一次世界大戦中の 1917 年に聖母マリアが毎月現れてこの地に礼拝堂を建てる事と 3 つの預言を残したと言われ、それ以来カトリックの聖地となり年間 200 万人の巡礼者を受け入れるためにこの町が造られたそうだ。

ナザレの心地良さに後ろ髪を曳かれながらも、威を振るって図書館裏から発つ市バスに乗り込む。途中でバスを乗り換え、山を越えながらおよそ 2 時間で、森を切り開いた巡礼だけのための町ファティマに到着した。町は、ビルもホテルもアパートも立ち並ぶ普通の町の様相を示しているが、その中心には 30 万人を収容できる巨大な広場と、その先には、カトリック大本山のバチカンをも凌ぎそうな、６５ｍの塔をもつ大きなバジリカ（大聖堂）が建っている。宿はバス停から歩いて数分の所にあるカナダ人経営のホテルで、英語が通じ、蝋人形館の割引券や巡礼用の安い靴屋さん、近くの鍾乳洞の行き方などレセプショニストから色々な情報をもらうことができファティマでの数日はあっという間に過ぎてしまった。

(写真、左から：広場とバジリカ、1917 年 10 月 13 日集まった人々の写真、蝋人形館：聖母マリアが 3 人の子どもたちの前に現れた場面)

さて、お待たせしました。「ファティマの奇跡」って何？を蝋人形館に入って見てみましょう。ここでも何か大きな力が働いたようです。時は 1917 年 5 月 13 日第一次世界大戦中(1914 年~1918 年)、7 歳、9 歳の兄妹と 10 歳の従姉妹の 3 人が泉のそばで羊番をしていると、そこに光がさし聖母が現れ彼らに告げた。”10 月まで毎月同日同刻同場所にわたしは現れます”と。子どもたちは両親や神父らにその話をして 6 月 13 日を待ちます。大人たちには見えなかったが聖母はやはり現れ子どもらに話をした。このことがうわさになり最後の 10 月 13 日には、近隣の村や町からなんと 7 万人もの人たちが集まり聖母の出現を待っていました。子ども 3 人が祈ると降っていた雨が止み、7 万人の前で太陽が火の玉にように回り、3 人だけに聞こえる声で、この場に礼拝堂を建てること、そして３つの預言を伝えました。（この戦争はやがて終わること、二

人の子どもは死者の国を訪問すること、そしてバチカン教皇が銃撃されること。）その後、預言通りに、戦争は終わり、兄妹は子どものまま天に召され、そして 1981 年 5 月 13 日バチカン教皇パウロ 2 世が撃たれ重傷を負う。　残った従姉妹はそのまま修道院に入りその後聖職者になりパウロ 2 世が召された同じ年 2005 年に 97 歳で昇天した。

このように、この奇跡は手が届くほど新しく、信仰の生々しさが感じられる。今でもこの町は毎年 5 月から 10 月まで世界各国から巡礼者が集まり、バジリカ前の広場は 10 万人にも及ぶ人々で埋め尽くされるそうだ。わたしも歩いたが、聖母を見た子どもたちの生家がある村へは徒歩 30 分ほどで行け、巡礼のコースにもなっている。また彼らはバジリカの中に眠っている。

人々はどんな目的でこの地を訪れるのだろう。奇跡の場所を実際に見てみたい、その場で何か感じてみたい、自分あるいは親しい人に奇跡を起こし願いを聞き入れて欲しい、世界の戦争を終らせて欲しい、観光、物見遊山などなど、人それぞれにその理由はあるのだろう。わたしはと言うと、この奇跡が本当に起こったのだという確信を持ちたくて現場に来てみたかった、そして、自分の足で歩いてみて、祈ってみて、信じられるという気持ちになった。遠路はるばる来た甲斐はあったように思う。

(写真、左から：聖母に会った 3 人の子ども、広場の十字架、5 月 13 日夜の広場、人の波)

ボタフメイロ（香炉振り回し）

ポルトの先のバルセロスから今年の巡礼旅を始めた。北上するこのカミーノ（道）は昨年も来ているので歩きやすいが、二度目なので刺激は少ない。目的地スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラへは約２００ｋｍの道のりだ。昨年は曜日の加減で、聖ヤコブ教会で行われるこの有名な儀式ボタフメイロ（現地のガリシア語で煙を吐き出すもの）を見ることができなかったので、今年は慎重に日程を調整した。

1 週間ほど歩き、やっと目的地のサンチャゴに着くという日、途中のカフェに立ち寄ると新聞に載っている日本人の写真が目に付いた。近くの人に聞いてみると、今日サンチャゴの大聖堂に日本の皇太子が来るとのこと。これは行ってご挨拶をせねばと脚を早め、息せき切りながら大聖堂前の広場に到着した。広場の半分には立ち入り禁止のロープが張ってあり、警備は厳重で、空にはヘリコプターが警戒している。多くの市民と一緒に歓迎のためにロープ脇で待っていると、殿下は屈強な現地 SP に守られて直ぐに車に入り巡礼路に行ってしまった。この間、わずか数分だった。翌日の新聞を見ると、杖を持って最後の数 Km を歩く巡礼姿が載っていた。皇太子の

正式名は徳仁親王、称号は浩宮。わたしの名前「浩司」の一文字が使われている。

（写真：ホテルから出て車に乗る殿下、翌日の新聞一面、大聖堂前の広場でデンマーク人と）

さて、ボタフメイロに戻ろう。殿下が巡礼に出発した正午ごろ、大聖堂内で行われる巡礼者のためのミサに出席した。スペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、英語での祈りが終わり、讃美歌が捧げられ、香炉に炭と香がくべられ、8 人の赤いローブをまとった僧たちが、滑車から伸びている太いロープをひっぱり、煙の出ている香炉をブランコのように揺らし始めた。次第にその揺れが大きくなり、聖堂内の端からはじまでぶらーん、ぶらーんと動き始め、香のにおいと煙が聖堂内に満ち始めた。

物の本によると、この香炉は 1851 年に作られたもので、それ以前のものはナポレオン軍が 1809 年フランスに持っていってしまったそうだ。今の香炉は世界最大で高さ１．６ｍ、重さ８０ｋｇの銅に銀メッキをほどこしたものだ。香炉の振り回しの弧は６５ｍを描き、２１ｍの高さにまで上がり、そのスピードは時速６８ｋｍにもなるそうだ。もともとはペストや伝染病予防のため 11 世紀に始められたようだ。

聖堂内は人でぎっしりで、何人か知った顔があり、何人かとは挨拶をかわしたが、ミサ中は私語禁止。やっと体験できたボタフメイロは思ったとおりのスケールの大きさで、目と鼻で十分に味あうことができた。これで、サンチャゴでの用は終わり明日からはスペイン最西端の港町、フィニステラ（フィステラとも言う）に向かおう。

(写真：大聖堂、ボタフメイロ振り回し、大聖堂前広場でオランダ人と)

スペイン最西端フィニステラ

サンチャゴからフィニステラまでは約９０ｋｍ、歩いて 3 日ほどの距離だが山を１０ほど越えなければならないことと、海に近づくと天候不順になるのが面倒だ。日程の関係から帰りはバスを使うことにする。

日本から履いてきた立派な革の登山靴は重くてファティマのホテルに置いてきた。代りに中国製の軽いトレッキングシューズを買い使い始めたが、やはりしっくりせず、これも巡礼中に捨ててしまって、今は日本から持ってきていたユニクロのスリッパを履いている。この先の行程は最後のパリも含めて全てスリッパでとおすことになる。超格好が悪いし、余りにも貧しそうなので泥棒さえ寄らないメリット？がありそうだが、これが足にとって一番楽なのだからしょうがない。

日曜日の朝にサンチャゴを出発、雲行きが怪しいので急ぎ足になる。低い山を２つ越え、とても牧歌的な村々を抜け、美しい川に沿って歩き、中世の石橋を渡る。素晴らしい巡礼路だ。
フィニステラへはそれほど多くの人は歩かないので空いている。２０ｋｍを越えると履物がスリッパではさすがに疲れてくるが、巡礼宿のある町までは残り数 Km だ。小雨がぱらついてきたのでカッパを着る。矢印に従って最後の森を抜けると立派な鉄筋コンクリートの巡礼宿が出てきた。ここの経営は教会系ではなく、私設なので利用料は倍の 1200 円ほどだが設備は素晴らしい。
夜中に隣のフランス人男性のイビキに起こされ、空いている離れた場所にあるベッドに移動した。

月曜日は３０ｋｍ歩く予定だったが、小雨がやまないので途中の村のカフェに併設されている巡礼宿に泊まることにした。途中パリから延々と歩いていると言う２０代日本人男性と一緒になる。彼は既に 2 ヶ月歩いており、山岳部の経験があるのでテントを携帯していて宿は余り利用しないそうだ。大学を卒業してこの旅に出たそうで、きっと何かを掴んで帰るのだろう。雨の中を先に進んでいった。ブエン・カミーノ！（良い旅を）

夜カフェで食事をしていると、全身ずぶ濡れの大男が黒のポンチョ姿でやってきた。事前に電話連絡してあったようで離れの部屋に入っていった。そのとき彼が低く太い声で言った言葉”I'll be back!”（俺は戻ってくる！）に近くにいたフランス人と顔を見合わせてしまった。このフレーズはターミネーターの有名なセリフで、彼の異次元的姿にぴったりだった。
(本当の彼はテキサスからの 40 代、一日４５ｋｍ歩くそうだ、やはりターミネーターかも)

（写真：雨上がりを歩く、巡礼宿庭でポルトガル人若者と、サンダルと足の裏のチェック）

火曜日は、昨日の遅れを取り戻すべく早朝 6 時に出発。天候は曇り。雨さえ降っていなけれ

ばよしとする。順調に歩いて 8 時間経過、３３ｋｍ歩いた。途中、この巡礼で一番大きな男に会った。２ｍ７ｃｍドイツ人 30 代。歩幅が大きく歩くのが早い。話していても首が痛くなるので先に行ってもらった。また、76 歳スイス人（本人はイタリア人と言っているが）から宿を教えてもらったのでそこに泊まることにした。宿は新しく清潔、広々としており文句なし。(1000 円）スパゲティとサラダを自炊し、イビキにも悩まされずゆっくりと休むことができた。

水曜日、今日も小雨で寒いくらいだ(15℃)。カッパで身をつつみ、滑らないようにゆっくりゆっくりと歩を進める。山を越え、半島の上からやっと海が見えるが、目的地まではまだまだありそうだ。海に近づいていくと 5 km ほど先に割と新しい赤い屋根の家々が密集しているのが見える。そう、そこが今回の最終目的地、スペインの西の果てフィニステラの町である。

町の対岸の山の斜面にある白い別荘の前で、そこを通る巡礼者に、若い女性(実はドイツ人で呼び込みのバイト中）が巡礼宿のパンフレットを配っていた。英語だったので少し話をしてみたところ、この別荘も各階ごとに貸すそうだ。これで巡礼も終わりだし少し贅沢をしようとこの別荘の最上階を 2 日間借りることにする(1 万円)。２LDK 海にせり出したバルコニー付きだ。問題は町からかなり離れているので買出しは海岸を 1 時間以上歩いて行き、帰りは買い物袋を提げてまた 1 時間歩かなければならないことだ。でも巡礼の毎日に比べればたいした距離ではないと自身を納得させた。天気は、曇り時々小雨と残念だがフィニステラの町をバルコニーから眺め飲むワインは最高だ。　Ende gut alles gut ！（終りよければ全てよし）とドイツ語が頭に浮かんだ。

(写真：中世の橋を渡る、自称イタリア人と、借りた別荘からのぞむフィニステラの町)

終わりに

今回の旅も守られて無事に帰宅できた。留守を預かってくれた妻にこころから感謝している。さて、総まとめとして、この旅を通じて、自身の人間性は高められたのか、そして自身のたましいは磨かれ成長したのか？その判断はやはり妻に委ねることにしよう。

歩き慣れたせいか､家に帰ってからは､買い物もジムも日常行動は全て徒歩での生活になった。足腰を鍛えてまた次回の旅を楽しみたい。

豪華客船　サンプリンセスでのクルーズ　（その２）

会員　中井川久男

８日目（終日航海日）

ダイニングにて胃にやさしい和定食の朝食後、B 夫妻のご主人とペアを組んでカーペットボウルに参加、ファイナルに勝残り　男性陣の勝利　プリンセスクルーズ社のロゴマーク入り「マグネットクリップ」を賞品としてゲットすることができた。

毎回参加しているプロ級の外人さん、今日も開始 15 分前には会場（5 デッキ中央）に姿を見せた。いつもスタッフに協力してゲーム進行を助けているボランテア精神旺盛な人である。

ちょこっと声をかけたらコツを教えてくれた。　ボールの面に軽い･重い部分あり　それを何処に持って投げるかによりボールが右・左にカーブしていくとのこと。

「なるほど！　なるほど！」

でも、説明してくれるが英語が解らない！ジェスチャーを見て理解した次第である。

（下船する際に再会して　互いの栄誉をたたえ　固い握手を交わした）

簡単なゲームであるが、勝負となると皆さん真剣な顔つきになり、力が入る。　負けた時の悔しさ　勝った時の喜びも倍増するものである。

奥さんが B 夫妻の奥さんと卓球トーナメントに参加するとのこと、見学と応援に 12 デッキに移動する。

B 夫妻の奥さんは学生時代に卓球を経験しており、勝ち上がっていくが男性に惜敗２人とも敗退してしまった。　（私の奥さんは、もちろん１回戦で敗退･･･）

悔しい気持ちをパッと晴らすため、ビンゴゲームに参加　大金を獲得しようと　目の色が金色に輝き始めた奥さん･･･

が、結局 30 ドルで購入したカードが紙屑となってゴミ箱へ直行することとなってしまった。

午後は、別行動となり、奥さんは氷彫刻デモンストレーション･ファッションショーを見学に　私は、船内をウロウロしてからダンス教室へ

生まれて初めてルンバのステップを教えてもらうが･･･　頭に入らない　いつもの男性スタッフの横について「ワン･ツー　ワン･ツー」とロボットのような動き･･･

だが、音楽に合わせて B 夫妻の奥さんと組んで　リードしてもらうと　何となく様になるので不思議である。

「ニューヨーク」なんていうダンス用語まで覚えてしまった。

B 夫妻の奥さんに「20 時からホイールハウスバーでダンスがあるので参加しましょうよ！」　と誘ってダンス教室を終了

帰りがけに、いつも一人で参加されているご婦人に「ダンスが好きなんですね！」と話

かけたら、「あなただって毎回来てるじゃない」と言われてしまった。　周りと比較すると極めて下手（全くの初心者）なので目だっているようである。
今日は、フォーマルナイトである。
　和服に着替えて 14 デッキへ　　いつものディナーメンバー全員がダイニングではなく 6 時半に予約を入れた有料の 14 デッキ･スターリング･ステーキハウスでのディナーである。
　メンバーの一人が下船日が誕生日で「船で祝ってもらえないんだよなあ～」とのことであったので、　サプライズ!!
　2 日早いが、お祝い事は前倒しでと　ハッピーバースデーを歌って、　お酒が飲めない私は、フラフープ大会でゲットしたシャンパンと奥さんがアート＆クラフトの船内イベントで作成したレイをプレゼントした。
　時計を見ると間もなく 20 時ダンス･ダンスとつぶやきながら和服で 7 デッキのホイールハウスバーへ　だが　B 夫妻がいない･･･
この頃から　船は、心地よい揺れが始まり
ピッチング（前後のゆれ）による衝撃が感じられるようになった。　まさしく船に乗っている感じである。
　だが、奥さんは美味しくいただいたステーキを全部　戻してしまい　ベットでぐったり　と言う事は、自由時間である。
奥さんをやさしくいたわりつつ　素早く和服から洋服に着替えて、部屋の電気を消してグッドナイト！　と囁き　ドアを蹴って室外へ！
へっへっへーとばかりに　にぎやかな場所を求めてフラフラと　途中で M 夫妻と合流
本日も午前様で部屋に戻りました。

船内　ラウンジと上映室

9 日目（終日航海日）
　この日は記録を取っていなかったので日中何をしていたのか判明しないが、　船の揺れが収まったものの奥さんはベッドから起き上がれず　果物にパンとヨーグルトを運んでやった記憶がある。　食事を運んでやった以外は、部屋の外にいたのだが････　持ち帰っ

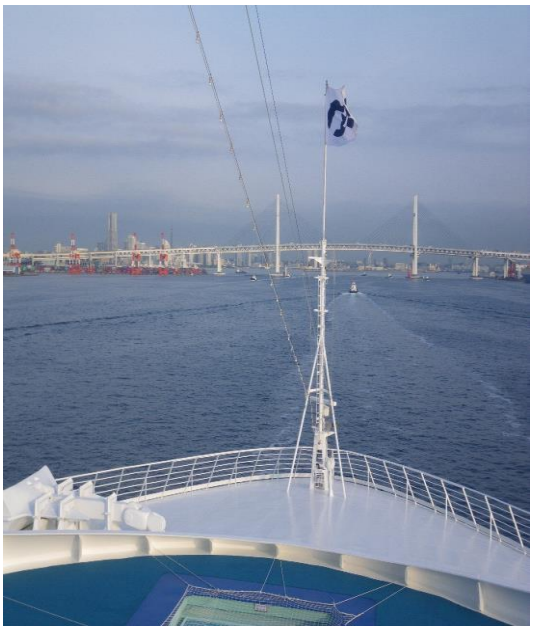
た船内新聞「プリンセスパター」を見ていたら　カーペットボウルで一人参加の女性とペアを組んでこのイベントに参加し2回戦で敗退したことを思い出した。
　その後の行動は不明であるが、最後の航海日であるので明日の朝で終了するクルーズを惜しんで楽しく過ごしていたのだろう！　この日を撮影したビデオを見てみたら船尾から船の航跡を撮影しながら、学生時代に歌っていた　「♪群れ歌う　カモメ連れてコバルトの海を　いざゆく♪」
とこぶしをきかせた歌声が記録されていた。
　夕食前に部屋へ戻り荷物の整理をしてスーツケースを廊下に搬出して夕食に出かけた。奥さんは夕食時にも立ち直れず欠席！
最後のディナーは全員そろわず7人での食事となってしまった。
　この日は、厨房スタッフによるフェアウェルイベントが有り、ケーキに灯りをともしスタッフが手で担いでテーブルの間を回り、イベント終了後に全員でそのケーキをデザートとしていただいた。　スタッフの皆さん　毎日の食事　ありがとうございました！
　夕食後は、ショーを見てからビスタラウンジで社交ダンスアワーに参加、B夫妻の奥さんとペアを組んで冷汗をかきながら楽しんでいたら　M夫妻を発見し合流
相手を変えてダンスを･･･　曲がタンゴに
「できません！首を振る動作だけはできますが･･･」　「なら　大丈夫！　大丈夫！」
でも、全く足が動かず･･･　今日が初めてなんだから無理ですよね！　「しょがないわね！」の一言で開放されてホットいたしました。
ダンスアワーが終了して解散したが、私は、楽しみを見つけるため船内を散策、再びビスタラウンジに戻って　ハワイアンナイトを最後尾の席で一人観覧していた。
　すると、前の人の両肩に後方の人が手を置いて長く一列に行列して踊り歩くダンス（レッツダンス）が始まった。　座って眺めていたが、釜山のOPツアーで知り合った一人参加の女性に発見され　　「来なさいよ！」　と促がされ
　断れない気の弱い性格の私は　すかさず長蛇の列に加わる。舞台に戻り行列ダンスは終了となったが、　舞台で円陣となってまた　新たなダンスが始まった。　舞台から去ろうとしたが、ダンスの特訓をしてくれたスタッフが帰してくれない。で、しかたなく？　円陣に加わりダンス続行（ダンスというより　ただ単に体を音楽に合わせられずに動かしているだけ）
円陣を組んでいる人達をじっくりと見てみると　なっなんと！　男性は私一人だけ･･･
このダンスがラストダンスとなり終了
スタッフと行列ダンスに誘ってくれた女性にお礼を言って解散した。

10日目（下船日）
　5時頃起床して10デッキの船首へ　この場所は丁度ブリッジ（船橋）の下になり見晴

らしが良い場所である。

船は、タグボートに先導され　ゆっくりとベイブリッジを目指している。
　私は、船に長く留まっていたかったので、下船時間は一番遅い 9 時 30 分を希望していた。
　朝食は､6 デッキのダイニングで　下船日のため通常より 30 分早い 6 時半開店である。
　船酔いから立ち直ったばかりの奥さんであったので、2 人席を希望して和定食をいただいた。
　食事を済ませ、8 時には部屋を出なければならないため、部屋に戻り　荷物の最終チェックをして部屋を出て５デッキのロビーで顔見知りの人達と挨拶を交わし下船を見送った。
　いよいよ最終下船者がプリンセスシアターに集合して　アナウンスに従い下船開始
　アナウンスは、ロックンロール・カントリーウエスタン・ディスコ等でダンスの相手をしてくれた女性スタッフが担当していた。
　そのスタッフが遠くから私を見つけ手を振って最後の別れをしてくれた。
　私も手を振りながら下船口の５デッキに向かい　後ろ髪を引かれる思いでサンプリンセスを後にした。

ビスタラウンジでのハワイアンナイト



タグボートに先導されるサンプリンセス

【おわり】

南極探検ツアー（その２）

会員　　馬越　治

２月９日：午前、ポートロックロイ及び午後、ゾディアック遊覧とダンコ島に上陸

ポートロックロイ：南極半島の対岸のジェルラシ海峡の岩だけの小島で、150 年ほど昔のイギリスの観測基地が、今は博物館と土産物店になっており、夏の４カ月だけは人が居る。郵便局もあって観光客が記念のハガキを出しに来る島だ。
我々も南極から記念のハガキを出し、土産を買う（帰国後、まる２ケ月を要してハガキは届いた）。

この島もジェンツーペンギンだ。向かいの小島にも渡り、巨大なクジラの骨を見る。捕鯨産業が盛んだった頃の遺産だ。
昼食は船上バーベキュー。チョリソと云うソーセージはパンに挟んでオヤツ。牛のブロックはスライスして昼食。美味ではあったが、アフリカ以来の風邪で咽が痛み、咳も止まらず食欲なし。
ダンコ島：上陸前にゾディアックで氷山や磯を観察する。磯にはアザラシが沢山いる。流氷の上にペンギンの天敵であるヒョウアザラシを発見、近づくと迷惑そうに水中へ。そこでボートパイロットが水中で特殊な音波を発すると、何とボートに寄ってくるのだ。

水がきれいで、３～４ｍもありそうな巨体が水中を進む様子がはっきりと見える。息遣いまで聞こえる迫力だ。しばらくボートの周辺に居たが、近くにペンギンを発見し突然追い始めた。しかし、スピードではペンギンに遠く及ばず、直ぐに諦めた。
やはり、隠れて不意打ちしなければ無理なのだろう。
濃い青色に輝く氷山の何と神秘的なことか。漂う氷山の横合いの水中部分に数百Ｋｇもありそうな石がはまり込んで浮かんでいた。氷河がフィヨルドを作った経緯が実感できる。

この後ダンコ島に上陸するも、体調悪くペンギンの営巣地を見て、高台は諦めて早め

に帰船する。
夜の内に船は北上し、７日に通過した南シェトランド諸島の南部に位置するデセプション島に向かう。

青く輝く氷山と白いものとの違いを聞く。氷河が斜面をゆっくり流れ下るとき、勾配がきつくなる場所をアイスフォールと云う。ここでは多数のクレバスが発生し、夏場にここを通過すると表面が溶解、凍結を繰り返し、太古の昔に閉じ込めた気泡が抜け出る。気泡の抜けた氷山が青く輝き、冬場にアイスフォールを通過したものは白いまま海に崩落する由。
船内でオンザロックを楽しむために海で氷山のカケラを拾って帰る。何故かプチプチと云う気泡のハジケル音がせず一同、頭をひねる。きっと、青い方を拾ったようだ。

２月１０日：午前、デセプション島と午後、ハーフムーン島に上陸
デセプション島：カルデラ湖の一部が海に開いていて、狭い入口を慎重に進む。幅 300m 程で浅瀬があり、先発グループは海が時化ていてこの入口を通過できなかった由。
南極唯一の温泉の出る島で入口の岩山は地熱のために雪が無く、荒々しい岩肌がむき出しになっている。火山島のため島全体が黒っぽいが、真っ黒な砂浜からは蒸気が噴き出している。少し掘ると熱くて手を浸けられないが、出るのは蒸気だけで温水が出るのではないから掘った穴に海水を混ぜると、冷たくなる。それでも好き者達は水着でハシャイでいた。気温４°だが、強風のため体感温度はこの日が最も厳しかった。
この浜は 100 年前まで鯨油を取るための工場があり、周囲の海域でクジラを乱獲していたのだが、化石燃料の普及に伴い２０世紀初頭に打ち捨てられた。
その後イギリスが基地を建設したが 1970 年の噴火で撤退した。

この島は南極の嵐や氷山からの避難場所として始まり、アザラシ猟の後、ノルウェー、チリが最初に捕鯨基地とし、欧米列強の自然破壊、クジラの乱獲の舞台となった。
それ故、現在の捕鯨禁止のトレンドには割り切れないものを感じる。
立ち並ぶ鯨油の巨大なタンクやボイラー等の残骸が 100 年の風雪を物語る。

ハーフムーン島：デセプション島から更に半日北上しネルソン海峡近く、リビングストン島の脇の小島で、アルゼンチンの観測基地がある。リビングストン島は大きな島で氷河が海辺に迫っているが、ハーフムーン島は小さく、この時期雪は僅かに残っているだけだ。

ここはあごひげペンギンとウェッデルアザラシが住む。ペンギンの巣が全て高い位置にあり、餌場からの帰りに岩だらけの急坂を登るのは大変な労力に見える。
それも、対岸のリビングストン島の氷河の崩落で津波が発生するであろうから、その影響だと思われる。

３日間の南極滞在は終了した。
過去に乱獲、乱開発はあったものの、現在は良く保護されている。何も持ち込まず、持ち去らず、動植物、微生物までも配慮されている。
この時期南極は多様な生命が溢れかえっており、限りなく美しく、興味は尽きない。

終始体調不良であったが、スケジュールは全てこなす事ができた。生涯忘れえぬ素晴らしい体験であった。
夕刻、ウシュアイアに向けて出航しネルソン海峡を通過した頃に、酔止め薬の服用を

再開する。

２月１１日、１２日：ドレーク海峡

時折クジラを見ながら船酔いもなくドレーク海峡を乗り切る。１２日夕刻ウシュアイア近くのヴィーグル水道に錨泊する。南極クルーズ証明書・DVD を受領し、クルー達とお別れパーティなど、楽しい夜を過ごす。

２月１３日：早朝ウシュアイア入港。空路ブエノスアイレス経由、サンチアゴ（チリ）へ。

２月１４日：陸路バルパライソへ移動し、夕刻１０日振りにピースボートに合流。かくして南極探検ツアーを終了した。

参考

① 南極圏とは

南緯 66.33°以南　　冬至「12/22」に１日以上の白夜又は夏至「6/21」に１日以上の極夜がある地域を云う。

上陸地点は南極圏ギリギリだが２月初旬でもあり白夜の時期は過ぎている。それでも昼の時間がかなり長い。　極点までは未だ 2,600km の距離である。

冬季はここから数百 km も海氷が張り出し、施設もなく、一般の観光客は南極半島ですら近づけない。

一方、北極圏では、例えばノルウェー領スバールバル諸島が北緯 80°であるが、人が住んでいるため冬季での観光も可能で、オーロラ観光は殆どが北極圏である。

② 氷河とは

積雪が次第に厚くなって氷となり、重力で流動するようになったものを氷河と云い、大陸での厚さは 2000m を越える所もある。

南極のような寒冷地での流動は１年に数～数十m。極点の氷さえも移動しており、その表示も毎年修正される。

棚氷とは氷河が海上に張り出して浮いている部分。厚さ 100～300m、先端部で卓状氷山を分離する。

③ 南極条約とは

領土の獲得競争を阻止し、南極地域（全ての棚氷を含む南緯 60°以南）の継続的な平和利用のために締結された。領有権の凍結、一切の軍事利用の禁止、全ての核爆発と核廃棄物処分の禁止、科学的調査の自由と国際協力など。締約国 47 か国、うち学術調査を継続する国 28 か国。条約は 1961 年に発効。

【完】

JATA 旅博 2013

会員　秋本　佳之

会場の出発ゲート

出発ゲートから旅が始まります。
さて、JATA 旅博 2013 では、どんな国とどんな人と出会えるでしょうか。楽しみです。

アジア最大級の旅の祭典

150 ヶ国・地域から大集合

ダークスーツ姿の旅行会社関係のサラリーマンでしょうか？
前を歩く上司の後に新人社員ようです。
業界日なので団体が多いです。

ロングステイ人気 NO.1 のマレーシア

ここでマレーシア民族舞踊が行われます。
本日は､｢業界日｣なのでカタログ展示のみでした。
ＫＬ、ペナン島の情報は、相変わらず多いです。
マレーシア政府は２０１４年を「マレーシア観光年」と銘打ち、観光促進キャンペーンを開始すると宣言。
今年１月にＫＬ行った時に街はビル建設が多かったですね。
来年に向けて、さらなる観光都市をめざしているマレーシアは、ロングステイ人気 NO.1 の国です。

トルコブースは、白色でデコレーションです。
トルコ美人のバック建造物は、エフェス遺跡のセルスス図書館を模擬したのでしょうか。
ニケのレリーフ、ネムルートの頭部の実物大の模型も展示されていました。
多くの遺跡を残すトルコの見事な演出です。
隣は、トルコ航空のブースでＣＭには、サッカーのメッシ＆バスケットのコービー、そしてバレーボールでは、日本の木村沙織選手の等身大のパネルがあ

りました。

美女と遺跡のコラボレーション

旅行博で人気の高いハワイブースです。
ステージは、14,15 日に向けてまだ準備中ですね。
ステージ裏では、ハワイ６島を映像で紹介してました。
今年のテーマは、「もう一つのハワイへ」
ここに来れば「なんでもできる自由となにもしなくてもいい自由がありカラダとココロをリセットする」
なんだかわかるような気がします。
この日は、旅行関係の女子学生さんの来場が多かったです。

女子学生さんとミス・ハワイのマハロ写真

中国のＬＣＣ「春秋航空」

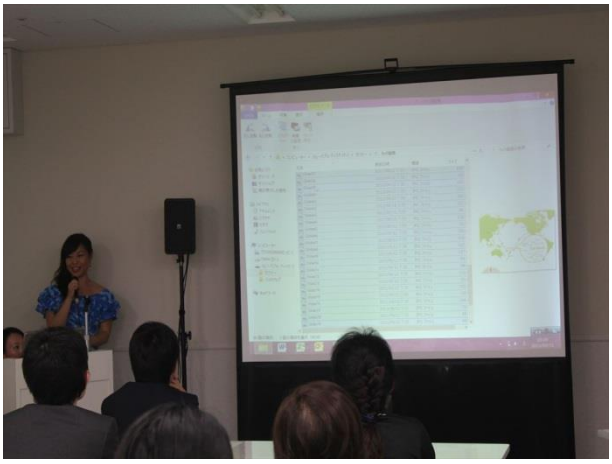
中国・上海市に本社を置く格安航空会社（ＬＣＣ）の春秋航空です。
2010 年 7 月より上海～茨城路線を就航してます。
2014 年 5 月末より国内線に参入決定しましたね。
春秋航空日本として成田～広島、成田～高松、成田～佐賀の３路線の就航予定です。
そして今年４月に「日本春秋旅行(株)」が誕生しました。社長は、日本人でチョッと「おネイ系」です。
おぎママ似かな？（笑）
ＬＣＣますますヒートアップしますね。

カンボジアのブースに来ました。
受付にいたカンボジアガールをアップでパチリ！
日本語がたいへん上手です。
東南アジアでも特に日本に友好的な人々が多いカンボジア。
日本語教育に力を入れていることがよくわかります。
この国も観光立国を目指しているのか去年訪れたシュリムアップは、今、建築ラッシュです。
このブース近くのミャンマー、ブータンも多くの人だかりが出来ていました。

カンボジアガール

語学・留学・ロングステイコーナー

語学・留学・ロングステイコーナーへ
隣左ブースは、「ロングステイ財団」で軽く挨拶して目的のコーナーに入りました。
フィリピン、マレーシア、オーストラリア、ハワイ等と各国の語学プログラムを紹介してました。
私が注目したのは、フィジー共和国での語学ロングステイです。
留学料金は、ホームステイで￥55,500/１week～￥1,264,000/48wee 位のようです。
南太平洋の島で語学ロングステイも良いかもネ。



クック諸島のセミナー模様

セミナーに参加しました。
南太平洋に浮かぶ島「クック諸島」です
プレゼンターは、現地観光会社の平田奈々さんです
ＬＳＣでもＭＬで何度か「クック諸島だより」として紹介させて頂きました。
太平洋諸島センター(PIC)が企画した「太平洋　魅惑の島々」と題してのポイントセミナーです。
他にフィジー、マーシャル諸島、サモア、パラオ等が魅力を紹介。
クック諸島・・・一度訪れたい島（国）ですね。

ONLYONE TRAVEL の山田洋介さん

中南米エリアからのご紹介です。
中南米専門現地旅行会社「ONLYONE」の山田洋介さんです。
山田さんとは、ファイスブックの友達で今回、来日することでお会いして来ました。
今一番人気は、「天空の鏡・ウユニ塩湖」ですよね。
日本人観光客も多く、特に若者（学生）が多く訪れ写真を撮っていくとのこと。
マチュピチュ、アマゾンクルーズ、パタゴニア等と心を震わす旅がしたいです。

まだまだ紹介したいブースがありますが出来ればＨＰに掲載したいと思っています。
今回の旅行博 2013 を訪れてロングステイをしたい国が増えたみたいです。（笑）・・・・おわり

東京散歩

迎賓館赤坂離宮見学

会員　　大野康昭

ＬＳＣメーリングリストで、田中和義さんからの迎賓館赤坂離宮見学のお知らせを頂いて６月、早速該当ウェブサイトから、見学申し込みを行った。見学希望日は、８月２９日（木）にしました。

メールで７月２５日に、抽選に当選した旨の通知を受け取りました。「平成２５年迎賓館赤坂離宮参観」参観証なるものが添付されてました。添付とはいっても、ただ、メールに参観日※変更不可、参観者名、参観日当日に持参いただくものとして（１）本参観証（２）身分証明書、（４）受付時間（開館直後は混雑しますので、来場時間の分散化にご協力くださいと書いてある）それと（５）いろいろ注意事項が記載されている（建物内は写真撮影は不可と書いてある）。

８月２９日、家内と二人で開館受付時間、午前１０時に間に合うよう家を出た。四谷で下車、四谷中学を過ぎ、学習院初等科を右に見て、すぐに迎賓館正門に到着。既にかなりの人が並んでいる。今日も酷暑だ。女性の人達は、日傘などを指して扇子で扇いでいる。団扇でも持ってくればよかったか。やがて１０時になり、西門から入る。手荷物検査と金属探知機による検査のため、また長い列が出来る。検査が終わると迎賓館パンフレットが渡される。

それによると、迎賓館はかつて紀州徳川家の江戸中屋敷があった広大な敷地の一部に立てられたというから、驚きだ。江戸時代は、更に上屋敷、下屋敷もあったことだろうから、江戸時代の御三家、大大名の所有する敷地のなんと広かった事か。迎賓館は明治４２年に東宮御所（後に赤坂離宮となる）として建設されたとある。戦後昭和４２年に改修して国の迎賓施設となった。

北面が正門をなし、建物前庭は世界の要人が訪日した時、閲兵の儀式など
が行われる場所で、テレビで見たことがある。これから建物内部の参観に入る。建物内部参観の所要時間は，約１時間だそうだ。

内部は、２８度に設定されているとのこと。余り涼しくかないが、汗をかくほどでもない。

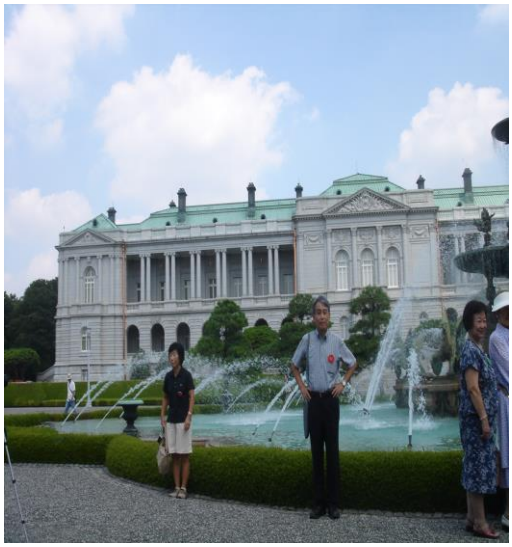
パンフレット通りに、案内される。各場所に説明員が待機して説明を行っている。一応部屋の名前だけを書いておきます。　彩鸞の間，花鳥の間、　中央階段・２階大ホール、朝日の間、羽衣の間等を見て回る。　特に感想も無いが、どこかの部屋の入り口に飾ってある小磯良平氏の絵が素敵だった。

建物見学が終わると、反対側（南側）の庭にでる。こちらが主庭で巨大噴水が水を噴き上げている。皆さん、この辺から写真を撮り始める。

まあ、このあたりは東京のど真ん中でしょう。　ホテル大谷のビルも見える。麻布、六本木、赤坂、紀尾井町、大京町、信濃町とどこへでも１０分とかからずいける。各国大使館も、大方この辺りあるから、招待客が来るにも帰るにも、警備にも都合はこの上ない。

北正面

西側面



南正面

噴水

暑い一日、噴水が救いでした。

酷暑はウナギで暑気払い

8 月 16 日（金）、酷暑をウナギで乗り切ろうと、ＬＳＣメンバーの元気じるしの面々が浦和駅改札に集合した。川口から秋本佳之さん、上尾から宮下弘さんとお友達の新井さん、葛西から佐々木知さん、紅一点の石井時子さんは越谷から、それからなんと山崎正喜さんは中国（一時帰省中）からおいでになり、田中靖人さんと大野康昭はさいたま市からの参加であります。目指すは、浦和でも老舗の「満寿家」、駅から約 7 分の便利さ。

到着したが、店は改装中、それでも満員御礼で、まずは仮設の待合室で 10 分ぐらい待たされる。その後、別棟の二階座敷に案内される。

やがてメニューがきて、値段を見るが年金暮らしの身にはなかなかと思うが、ここは、清水の舞台から飛び降りる覚悟で、エイヤーと注文を決める。中には、特上ブランドの「坂東太郎」を注文する人がいて、「ジェジェジェ！」、まずは、ビールで乾杯。

皆さんご存知の秋本さん、宮下さん、田中（靖人）さん、大野の自己紹介は、割愛。
石井時子さんは、今年のマレーシア下見ツアーに参加、会員歴は長い。
山崎正喜さんは、中国で勤務中とのことですが、名刺を見るとかなりの要職
マレーシアの長期ビザ、MM２Ｈを取得済み、退職後はＫＬでロングステイの予定
新会員の佐々木知さんは、一応定年にはなったが、会社の要請でまだお勤め中、ボランティアでタイで義足（地雷で片足なくされた方達のために）作成を指導しているとか、
新井さん、宮下さんのお友達で、ロングステイに興味がある。オートバイで日本一周も経験。

そうこうしている内に、御待ちかねの「うな重」の到着。
ウナギを堪能した後、山崎さんは所用で帰宅しましたが、その他の参加者は近くのカラオケ店に行って腹ごなし。

演歌、フォーク、英語版等、幅広いジャンルの歌を絶唱！　皆さんなかなかの芸達者揃いとお見受けいたしました。
閉めは、田中＆石井さんのデュエット。
佐々木さんが、知らないうちに写真を撮っておいてくれました。　そのうちの 1 枚、カラオケの様子をご披露いたします。

うな重とカラオケの合成写真

佐々木さんの写真の腕前もなかなかのもの

楽しかったので、来年の夏も是非計画したいな。　来年は、もっと多くの会員の参加を期待いたしております。会員の皆様のお望みの企画があれば、事務局までご提案ください。

（記　　大野）

9 月座談会

9 月 17 日（火）に、9 月座談会がさいたま市市民活動サポートセンターにて午後 1：30 分より開催されました。
テーマ：世界一周ピースボートクルージング　三回目
講師：馬越治氏
5 月、7 月と続けてビデオによる今回が第 3 弾の最終回です。今回は、アフリカのサハリ、南米ブラジル、リオデジャネイロ、南米先端のチリのブンタナレス、パルパタイソ、ペルーのカヤオ、イースター島、タヒチのパペーテから横浜までの３ヶ月に及ぶ航海のビデオによる上映です。いつもながらの美しい映像と的確なナレーションと素敵なバックグラウンドミュージックによる上映を堪能いたしました。馬越さん、本当に永い間、有難うございました。
今回の出席者は、田中（和）さんご夫婦、峯尾さんご夫婦、桂さんご夫婦、坂詰さん、秋本さん、新井さん（近く入会予定）、中井川さん、三浦さん、馬越さん、大野の皆さんでした。

１０月１０日　情報交換会

今年度、２回目の副理事長の吉原紘昭氏による情報交換会が開催されました。
日時：１０月１０日（木）；１３：００～１５：００
場所：ＪＲ武蔵野線、武蔵浦和駅西口、サウスピア８階
講師：吉原紘昭氏
　　少人数ながら、内容のある有意義な情報交換会となりました。
テーマ：★　海外パッケージツアーを楽しくする旅テクの秘訣
　　★　１１月２２日、出発予定の海外ロングステイ下見ツアー

１０月１６日（水曜日）特別座談会

１０月１６日、午後１時３０分よりさいたま市市民活動サポートセンターにて、
ＬＳＣの英国サポートセンターでもある、ウエストンアカデミー・ＵＫを運営なさっているとも子ハリスさんの訪日に合わせて、英国ロングステイの特別座談会を開催いたしました。台風の影響で開催が危ぶまれ、心配いたしましたが、２０名近くの会員の参加を得て盛会のうちに特別座談会を無事終了することが出来ました。
終了後は、懇親会を会場近くのレストラン「サイゼリア」で開催、話に花が咲きました。

とも子ハリスさん（最前列右より２人目がハリスさん）を囲んでの記念撮影

２０１３年　ＬＳＣロングステイスクール　イン越谷

１０月２０日（日曜日)、午後１；３０分より越谷市市民ホール、サンシティ越谷のおきまして、今年度最後のロングステイクラブ主催のロングステイスクールが開催されました。あいにくの台風による天候悪化で、参加者の出足が鈍ったようです。予定より参加者が少数でした。講演内容は　１．会員の林さんご夫妻によるマレーシア・ペナンロングステイ　２．とも子ハリスさんによる、英国ロングステイ　３．副理事長の吉原紘昭氏による各国ロングステイの比較検討でした。

１０月２６日（土）男の料理教室

会員の林裕子さんによる恒例の料理教室も今年で三度目を迎えました。今年は
お酒のつまみにもってこいのメニューの実践教室です。会場は、さいたま市中央区の下落合コミュニティセンターです。女性は林さんと、妹さんとお友達の三名、男性は塚本理事長、吉原さん、秋本さんと大野、後から参加の佐々木さんとで５名、メニューは、サーモンとホタテのカルパッチョ、フランスパンのガーリックトースト、ひじきのポン酢和えとワインとの合性もバッチシの料理です。そこに差し入れのワインの赤と白、秋本さんのトルコ帰りのお土産のイチジク等も並び、豪華な午餐会となりました。
丁度、おりしも本日はさいたま市主催の「ツールドフランス」が近くの新都心で実施されていましたので、ほろ酔い気分で見学にお出かけましたが、混雑でまともに、レースを見ることは出来ませんでした。

本日のメニューを説明する林講師

参加者記念撮影

編集後記

『編集後記』

今年は、１月に念願のマレーシア下見ツアーを実行する事が出来ました。旅行会社との協同による実施でしたが、総勢９名の参加者による４泊５日の下見ツアーでした。現地で会員ではありませんが我々ＬＳＣの協力者の中島俊郎氏ご夫妻の御尽力で楽しく、有意義な旅になりました。このように会員の皆様に喜んで貰える海外ロングステイ候補地への下見ツアーを来年度も是非企画したいと考えております。今年からＬＳＣ会報「ロングステイクラブ」も電子版での提供となり、ご不便を感じていらっしゃる会員の方々もあろうかと思いますが、来年度からは、編集委員の数を増やし、校正等にも少し力をいれ、更に楽しい紙面を提供できるよう頑張っていく所存です。一年間、お読みいただいて有難うございました。

２０１３年　秋季号　Ｖｏｌ.８６
発行日　　２０１３年　１０月３０日
発行人　　塚本　茂
編集・校正　　大野康昭
　　その他編集員

☆ロングステイクラブの概要と入会について☆

＜目的＞

☆　ロングステイクラブは、快適な生活環境を求めて海外および国内で長期滞在を希望する方々を対象とし、その日常生活に必要な各種情報の提供や体験セミナーなどを通じて現地での「不安」「疑問」から解放して、生きがいのある滞在ができるように支援し、広く公益に貢献することを目的とします。

＜主旨＞

1. 自分の収入に応じて(主に年金等の範囲内で)
2. 自分の力で(体力経験等に応じて)
3. 自分なりの方法で(単独・家族・友人等で)
4. 自分なりの生きがいを求めて(国際交流・語学研修・ボランティア・スポーツ等)
5. 海外で生活体験をする(ツアーでも移住でもなく)

そのための情報交換・友人作り・高齢化社会におけるシルバー世代の余暇活用を生き方の選択肢とし活動します。

＜主要活動＞

1. 月例会の開催(海外体験報告・海外滞在計画の発表・情報交換)
2. 地域別交流会の開催(東京・千葉・神奈川・埼玉・関西・九州)
3. 同好会活動(海外各国別の同好会・各趣味の同好会等)
4. 会員相互の自主企画による海外グループ旅行の推進
5. 国際交流活動(各国友好協会・ボランティア・語学研修・ホームステイ)
6. 会報「ロングステイクラブ」の発行

＜留意事項＞

1. 当会及びリーダー(名称の如何を問わず)は、会員が企画海外旅行・滞在・同好会の諸行事等において一切責任を負いません。参加者は一切責任が自己に帰することを承知の上で参加下さい。
2. 当会は、非営利の団体です。会員は当会の諸活動(例会・会報・会員名簿等)を営利目的に利用することを禁止されています。

＜入会＞

当クラブの主旨に賛同される方は、年齢・性別・国籍に関係なく、どなたでも歓迎します。

年会費

- **4000円（1月から12月）を下記口座にお振り込み下さい。**

お振込先口座

- **銀行口座**

  りそな銀行東京中央支店普通5807817

  ロングステイクラブ

  郵便振替

  00120-2-166202 ロングステイクラブ

NPO ロングステイクラブ事務局

〒337-0017

埼玉県さいたま市見沼区風渡野470

電話/FAX 受付:048-685-2470

E-mail:info@longstayclub.jp

特定非営利活動法人「NPOロングステイクラブ」の目的

この法人は、快適な生活環境を求めて海外及び国内での長期滞在を希望する人々を対象とし、その日常生活に必用な各種情報の提供や体験セミナーを通じて現地での「不安」「疑問」から開放して、生きがいのある滞在が出来るよう支援し、広く公益に貢献することを目的とする。（法人の定款第３条）

「**ロングステイクラブ**」は、登録商標です。

（登録第４５４６８１１号）

happy
Halloween